

駒師 富月(大澤建夫)氏 取材記事

掲載：2019(令和元)年12月14日号 読売新聞 静岡版 31面 Saturday しずおか

ほのほの
@
タウン

タウンリポーター
のコーナー

◆富士宮市 将棋の駒と
いえは山形駒天童市が有名
だが、無名は「富士駒の会」
(立井敏雄会長)の名もよ
く聞かれる。

独学の駒師 夢彫り込む



富士宮市駒師の町にしたいと夢を語る大沢さん

ケ丘)が1989年に設立
した駒作りのグループだ。
当初、公民館のサークルだ
ったが、今では10人ほどの
駒師を輩出、会員の作品は
市のふるさと納税の返礼品に
選ばれたり、魔王戦で使
われたりと注目を浴びてい
る。

大沢さんは、長距離トラ
ックの選手から独学で駒
師になった。35年ほど前、
仕事駒、家を持つことが
多かったため、子どもと共
に

駒の趣味を持ちたいと本を
買い一冊に将棋の勉強を始
めた。小学4年の長男を筆
頭に3人の息子たちはみる
みる駒を上げた。送り迎え
した大沢で待つ間、「自分
にも彫れるかも」と思い、
駒作りを学び始めた。

3歳の時、天童市で開か
れた子供の将棋の全国大会
で、自作の駒を駒取売場に
持ち込んだ。「売れ込みは
何十人もあるが、売れる駒
は初めて」と、その場で賣
り取りが決まり、制作も依
頼された。その後、作った
駒はアロのタイトル戦で何
度も使われ、将棋の雑誌に
も載るようになった。

選手を始めた頃、親戚から
駒作りに専念、著名な書家
と合作で駒を作ったり、カ
レンダーの表紙を飾ったり
と、活躍の場を広げた。

大沢さんは、適度な整さ
と重さがある駒のツグ
の木を使う。「指す人の身
になる」が信条で、駒が手
から滑り落ちることがない
よう底辺の角を取らずに残
したり、字を見やすくした
り、工夫を凝らす。「自分の

作品に全く満足していな
い」と厳しい。自分の駒に
磨きをかける一方で、益で
は小学5年生から8歳まで
4人に授を教え、後進の育
成にも力を注ぐ。「ゆくと
くは富士宮を天童と並ぶ将
棋の町にしたい」と、小さ
な駒に大きな夢を刻んでい
る。(斎藤弥生)